

Title	気候と文明, ハンチングトン著, 間崎萬里譯
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.2, No.1 (1922. 11) ,p.144- 146
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19221100-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

此の外二三の横穴並に其の遺物に就いて説明してあるが右と大同小異につき略す。

猶本書の終に京大の濱田博士の談が附してあるが、それに據ると「此横穴には日本で最も珍らしいものであつて横穴の形式が塚形古墳の内部と類似してゐるのは注意すべきである、斯かる珍奇なる形式のものを見たのは自分としては初めてである。古墳としては後期時代に屬するものであつて、今より一千二三百年前のものであらう。蓋し本年の日本考古學界に於ける最も大なる發見であらう」と語られたとの事である。

要するにこの横穴は北陸に於ける考古學資料として貴重な遺跡であるからして、適當の方法を講じ、これを保存せられむ事を希望するのである。(武田勝藏)

氣候と文明

(ハンチングトン著
間崎萬里譯)

今夏九州旅行の折車中に乗り合したハワイ歸りの移民が口を極めて同地の氣候の單一性を嘆じてゐた。彼等がはるく日本に歸省するのにも單に郷國を慕ふのみならず氣候の變化に觸れんことを切望する情にも基いてゐるらしい。此氣候が人類の文化的活動に如何に重要な意義あるかを説破したものがハンチングトン氏の「氣候と文明」(Civilization and Climate, 1915)である。

著者はまづ「人種と地的環境」なる題下に於て人種がその地的環境を異にせるため該人種の標準的能率より劣る諸事實を示してな

る。則ち合衆國の北部南部に於て黑人はその人種の遺傳性實により何れも白人より劣れる能率を示してゐる。然し北部に來住せる黑人はその人種の普通の標準以上に卓越し、南部白人がその標準より劣つてゐる。これは主として氣候の適不適を要因としてゐる。次に「熱帯の白人」なる章に於てかゝる事情が温帯のみならず寒帯地方にもあてはまる事を述べ、熱帯地方に病する白人が疾病や或は怠惰、癩癬、飲酒癖、色慾の悪質に悩ませられることを指適し更に「季節の影響」なる章に於て以上の事實を科學的に説明せんとしまづアメリカ各州の工場職工、海陸軍學校の生徒の作業統計により、何れも春季及び秋季に於てその能率が最高點に達して、中冬及び中夏に於て最低點に達することを述べ、更に「湿度と温度の影響」なる題下に於て平均湿度は肉體的勞働に於て華氏六十度乃至六十五度、精神的活動に於て華氏三十八度の時を最適とする事。湿度は冬季に於ては最も濕潤の時、春秋に於ては湿度平均約五十度相對湿度約七十五パーセントの時、夏季に於ては平均温度六十五度乃至七十度、相對湿度約六十パーセントの時を最適とし「作業と天候」なる章に於ては偶發的な短期の強風及び屢次の軟風或は和風は有利なるも、長期の無風或は長期の強風は元氣を喪失せしめる事、温度の目々の變化に於て僅少なる上騰は有利なるもそれ以上の上騰は益なく、又温度の下降し始める時は有害であるがその下降が稍大なる時は上騰の場合よりも一層刺激的である。併しながらそれが甚しい場合にはその有利な影響を減ずること。又ニューヨークランド地方に普通なる連續的天候、最初の一兩日は晴天であり、次の一兩日は部分的に曇天を見、その次は曇天、

最後も亦曇天でありその間降雨を見、次で又空が晴れて同様の連續現象を反覆する天候に於ては、職工の能率は晴天日に於て甚だ低く半曇天日、第一曇天日に中庸であり、暴風の終るとき最も高しといふ法則を見出すことを述べ、かゝる天空の變化と湿度の増減、並に温度の緩慢な上昇と急速な下降とを伴ふ暴風は何れも刺激となり各々能率を増すと論じてゐる。

次に「理想的氣候」「文明の分布狀態」「合衆國に於ける活力と教育」「文明の諸條件」の諸章に於て前述の諸條件に適へる氣候の分布を示し、現代文明の配分が之と全く相應せること、例へば氣候の最適なる合衆國、及び加奈陀、西歐羅巴、日本等が文明の發達に於て卓絶せる事、刺激的氣候の存否が文明の條件を決定する一要因なる事を述べてゐる。

然らばメソポタシヤ、ユーカタンの如き暑熱の平野が過去に於て文明の中心地となつた理由は服邊に存するか。著者は之に答へて「氣候帶の移動」「文明中心地の移動」「文明に關する氣候的假説」なる諸章に於て氣候帶は過去に於て移動せり。今日の文明地帶諸民族が受くる有利的氣候は日々の天候の刺激的な變化を伴ふ屢次の旋風に基くのであるが、古代に於てはかゝる旋風の中心は現在よりも稍や南方に位せる如く、然してその移動は太陽の黑點の變化に基ける如しと云ふ事を論述してゐる。

本書が氣候と文明の相關を論じた諸説の中の最も斬新なるものなる事は申すまでもなく、殊に人文地理の長著なきに苦しめる本邦學界が本書の譯書を得たることは早天に滋雨に接したるの觀がある。本篇の前半に對しては何人も異論なかるべくたゞその後半

氣候帶の移動が文明の變移に關係せりと云ふ假説が恐らく學者間に多少の異論を惹き起すならんと察せられる。例へば著者は「支那に於ける主要中心地は古來揚子江の流域であつてその地方に發達した文明は近代の歐米文明と同様の性質を有してゐた」(邦譯三八二頁)と云つてゐるが之は黄河の誤りである。従つて著者が古代の暴風帶は支那の中部、殊に揚子江流域の平野を中心地帶とし此處に刺激的氣候を形成したと、推論してゐるのが明かに矛盾となつてくる。恐らく全般にわたり古代文明の實狀を今一層細密に研究したる場合には著者の意見に對し多少の疑問が湧いてくるだらうと思ふ。然しながら著者がその多年の不屈の努力によつて遂にかゝる大膽なる提唱を敢てするに至つたその功績に對しては何人もその學的偏狹心を棄て、感謝しなければならぬ。かつて鳥居博士が三田演說會に於て我國石器時代の土偶に雪除眼鏡をつけるものあることを指摘されしことを記憶する。果して古代關東平野の寒氣が、今日より烈しく、遮光器を必要とせしや、是等の關係はなほ一層周密なる科學的研究によつてその適否を検討する必要があるのである。今後の古代文明史家は從來看却せられたる氣象上の現象に就て一層の注意を拂ふ必要があると思ふ。

尙餘計な事であるが注意すべきは著者が我日本をもつて文明的活動に傾なる刺激的氣候の範圍に屬せしめたことであつて、從來我日本に於てはその箱庭的景色を讚美して「日本は世界の公園なり」などと稱してゐた。然しこゝにいふ自尊心を小學校で養はしめるは考へものである。それよりもむしろ日本の氣候が活動に有利で世界有數なることを知らしめる方が將來の活動上から云つても

更に有意義であると思ふ。

又著者が人種はその地的環境によつて活動能力に相違を生ずること、劣等人種も氣候の有利な地方に移住すればその人種の普通の標準以上に能率の高まることを論じたることも悦ぶべきことである。なんとすれば此意見は小數の白色人種によつて氣候の有利な廣大な地方を占領してゐる現在の状態を否認する一つの理由となるからである。

要するに本書は多年人文地理の良書なきに苦しめる本邦學界に非常なる刺戟を與ふべき良著であつて繁忙な時間を割いて翻譯せられたる譯者の勞苦に對しては感謝に堪へざる所である。たとへば書が中外文化協會の定期刊行書の第二冊であり、一般に向つて非賣品なる事は惜みてあまりある所である。(松本信廣)

商業と經濟 第二冊

(長崎高等商業學校
研究館年報)

長崎高等商業學校の職員卒業生及在學生を以て組織せられたる同校研究會の本年度年報である。武藤長藏氏の「鐵道に關する智識の我國に傳はりし門戸としての長崎」は同氏特有の綿密なる考證によつて日本人中鐵道に關する智識を最も早く得たのは長崎の和蘭通詞なる事、汽關車の模型を日本人が最初に見た場所は長崎海碇泊中のプーチヤチン座乗の露艦内にして年は嘉永六年なりしこと、安政四年長崎出島に於て黒田侯の家來が蒸汽車雛形を運轉したる事、慶應元年の頃同大浦海岸通に汽車鐵道の布設されしこ

と又鐵道に關する智識は支那を經由し我長崎より輸入せられて我國に傳はりし場合もあること等を詳細に論じてゐる。

田崎仁義氏の「支那古代に於ける氏及び姓の研究」は同氏年來の蘊蓄を傾けられしものである。第一章「氏は血族的又は地域的團體の稱なり」に於て、先づ父と君、母と氏、民と氏との文字的考證をなし「君」は「父」なる文字より轉義轉形し「民」は本來「女」より繁殖したるもの「又は「母より生れ出でたる族衆」と云ふ如き意味を有し、「氏」は「民」なる文字と系統的關係あるべし、氏は或る一定の民を以て成れる部落團體と之を統率する君長とを包括せるの名なるべしと論じ、鄭樵の「氏族序」を引き、氏は主として部落の占居せる地域又はその君長の名によりてその稱を得たりと結び、次に第二章「姓は母系族制の遺意」なる題下に於て姓の文字と關係あるは性性姓の三字にして性が生心の標識なることと姓は生身の標識なるべく、姓が女に従ふは死者の靈魂が女子の胎内に入りて妊娠すると信ぜられし神秘的觀念に基くべく、かつ原始的民族は夫婦別居の風俗あり、姓は母系の生身の標識なるべしと論じ、支那の原始的姓は母の所在の地名により起れり、異姓結婚の習俗は人類天賦の倫理的感情、並に同姓結婚の惡結果を來せる經驗に基くべしと推定し、第三章「同徳同姓異徳異姓の説」に於ては姓が母系生身の標識より更に體質稟性の異同を表示する標識たるの意味にも使用せらるゝに至りしこと、第五章「賜姓の事」に於て姓が有力者によつて賜ふの制度發生せしことを述べ、第六章に五帝時代の姓に關する傳説を擧げ姓が母系に發し徳姓賜姓を経て遂に父系姓に歸着せることを説いてゐる。第七章は更に姓と祖先